

明治期中等学校図画教員の研究（7）

—東京府・中部地方—

金子一夫*

（1990年9月14日受理）

Drawing Teachers of Secondary Schools in the Meiji Era（Ⅶ）

Kazuo KANEKO

（Received September 14, 1990）

1. はじめに

本稿は『茨城大学教育学部紀要』第37号（1988）～第39号（1990）および『茨城大学教育学部教育研究所紀要』第20号（1988）～第22号（1990）に発表した同題の論文(1)～(6)に続くものである。本稿では(5)、(6)で示せなかった東京府下の実業学校の図画教員と、中部地方のうち山梨県、長野県、新潟県の明治期中等学校の図画教員とを網羅的に明らかにすることを目的としている。残った県のうち静岡県、岐阜県は、(7)に発表する。さらに残った県、すなわち富山県、石川県、福井県、愛知県は(9)以降に発表する予定である。

2. 東京府下の実業学校

前節で述べたように本節は(5)、(6)で発表するはずであった内容である。本節では特に断らない限り氏名、勤務期間は当時中等学校職員録による。

府立職工——杉田利勝の経歴は不明。柿山蕃雄については府立一中の項で既述。当時は高等師範学校との兼務であるが、どちらも嘱託。川口辰の経歴も不明。建築製図も教えていた。浜訓良は絵画専門の教員らしいが、経歴不明。野村虎松は宮城県出身、孤松と号した洋画家である。絵画修業歴は不明だが、宮城県尋中・第二高等中学中退なので同校の図画教員溝口耕一に学んだと思われる。

府立織染——勤務期間は『八工七十五年史』（昭和37年）を参照。この学校は明治二十年の八王子織物染色講習所が起源で、二十八年に私立八王子織染学校となり、さらに三十六年府立織染学校となった。表中に挙げた教員は図画や図案担当であるが、いずれも経歴等が判明しなかった。

府立工芸——学校の性格から多くの美術家が教員として勤務している。その中で土屋安彦と香取五郎が図画や工作図を教えたことが、中等学校職員録からわかる。山梨県立工業でも触れるが、東

* 茨城大学教育学部美術科教育研究室。

京工業学校図案科卒業の土屋は、正しくは東京工業学校工業教員養成所工業図案科卒業。香取は京都高等工芸学校図案科卒業の図案の専門家。煙草の「胡蝶」の名称と包紙は、香取が懸賞に応募して当選したものらしい¹⁾。

早稲田実業——早稲田中学図画教員の山口大造が、実業学校の図画も担当。勤務が確認できたのは、明治四十一年からであるが、中学の方はそれ以前から勤務しているので実業学校も四十一年以前から勤めていると思われる。

大倉商業——田崎延次郎の勤務期間は、東京経済大学附属図書館の教示による。田崎については明治学院中学の項で既述。

中央商業——小倉要の勤務期間は東京都公文書館所蔵の旧学務課文書中の履歴を参照。小倉については東京中学の項で触れた。乾長光は南陽と号した日本画家で、当時淑徳高女にも勤めていた。

京華商業——高橋勇は烏谷と号した日本画家で、成城学校に勤めていたことがある。そして、明治三十六年頃から四十二年まで清国北京大学に勤務した。高橋の後任は東京美術学校日本画科同期卒業の羽生道也。羽生は明治三十七年八月に遼陽で戦死してしまうので、京華商業への勤務はごく短いはずである。椎塚修房は東京美術学校西洋画科の卒業。椎塚も短期間の勤務。椎塚の後は高橋、羽生と東京美術学校同期卒業の鈴木武之助。鈴木は明治三十三年から大正期まで京華中学に勤務したので、京華商業にも大正期まで勤務したのではないかと思われる。

京北実業——京北中学に勤務していた柴崎恒信が兼務。柴崎は大正期まで京北中学に勤務したので京北実業にも大正期まで勤務したと思われる。

慶応義塾商工——勤務期間は各年度の『慶応義塾総覧』を参照、ただし明治三十八年から四十年まで未見。明治四十一年度は慶応義塾普通部に勤務していた能勢鶴次郎の兼務。能勢は明治三十四年頃から普通部に勤務していたので、四十年以前も商工学校兼務であったと思われる。四十二年増田松之が普通部に赴任し、能勢は幼稚舎に移ったためであろうが、増田が商工学校兼務となり、大正八年まで勤める。増田については慶応義塾普通部の項で既述。

日本工芸——星野誠二は新潟県出身で明治三十七年十月に小山正太郎の不同舎に入って、西洋画を学んだ。藤泉賢四郎の経歴については不明。

岩倉鉄道——同校は現在の岩倉高等学校の前身。谷齊一の勤務期間は別の勤務校へ提出した履歴を参照。

東洋商業——松井貞世の就任期日は東商学園東洋高等学校の教示及び『（東洋商業学校）校友会雑誌』第三号（大正5年3月）の職員名簿を参照。松井貞世については成城学校の項で触れたが、英人ウルフと高橋由一の天絵学舎に学んだ人。

東京航海——林章雄については経歴等全く不明。

共立女子職業——同校は明治十九年創立の歴史のある学校。編集の都合で表は明治三十年から示す。二十九年以前の図画教員で判明しているのは、明治二十一年に結城正明が赴任したことだけである。三十一年頃赴任の鶴殿清については新潟県長岡中学の項で触れる。島田佳矣は東京美術学校絵画科卒業で、後に東京美術学校の図案科の教授となった人。東京美術学校に勤めるようになっても共立女子職業学校には大正期まで勤めている²⁾。井手馬太郎も後に東京高等工業学校の図案法の教授になった人。木村俊秀は淡香と号した日本画家。椎野シゲについては経歴等不明。

東洋女芸——豊岡保太郎は東江と号した日本画家で、東京美術学校日本画科の卒業。

青山女子手芸——岡田三郎助は当時東京美術学校の西洋画科教授。岡田の勤務期間ははっきりしないが、かなり長期間教えていたと思われる。ちなみに当時青山女子手芸学校で彫刻を教えていたのが相馬邦之助で、『象牙彫刻法』（明治23年）という著書のある彫刻家。

東京技芸女学校——南寛明については帝国女子専門学校附属日本女学校の項で触れた。

女芸専修——佐久間文吾は最初本多錦吉郎の彰技堂に学び、次いで小山正太郎の不同舎に学んだ。生巧館の版下画家としても活躍した。近藤泰山は徳島県出身で本名を智四郎といい、川端玉章に学んだ日本画家。

女子商業——小森また子、金杉仲子ともに女子美術学校日本画科の卒業。

奎文美術女学校——奎文高等女学校と同じ経営者の経営になる。図画担当者も同じ平木弥一郎である。美術女学校といってもどのような教育をしていたのかは不明。平木については奎文高女の項で既述。

その他——東京府下の女子の実業系の学校として、現在の忍岡高等学校につながる日本女子美術学校や現在の女子美術大学につながる私立女子美術学校があった³⁾。それぞれ当時の有数の画家が教員として勤めていた。そこでは普通教育としての図画教育というより、専門教育としての絵画教育が行われていたわけであるから、普通教育あるいは基礎教育担当者としての図画教員を取り上げている本稿ではなく、別稿で取り上げることにはしたい。

3. 山 梨 県

山梨県師範学校——師範学校図画教員に関する旧稿「明治期師範学校図画教員の研究」（『茨城大学教育学部紀要』第32号、1983年）の内容と大きく変わることはない。ただ、松林織之介が彰技堂で学んだらしいこと、山崎勇馬が少なくとも明治四十二年三月までは勤務したらしいことが、その後判明した。松林は隈元謙次郎氏筆写の「彰技堂門人帖」を見ると二番目に名前が書いてある。国澤から彰技堂を引き継いだ本多錦吉郎は三番目に書いてあるので、当然、松林は国澤新九郎に就いたはずである。山崎の勤務期間は当時の『山梨県職員録』を参照した。

甲府中学——明治二十年頃から二十三年頃までの『山梨県職員録』で山梨県尋常師範学校で図画も担当したと思われる小坂階起の、尋常中学校兼務が確認されるので、小坂が同校の図画も担当したと思われる。同校が山梨学校とか徽典館初等中学科と称した明治十年代後半も小坂が担当した可能性が強いが、職員録などで兼務の確認ができなかった。植松謹蔵は明治二十五年当時の『山梨県職員録』の尋常中学校の項に名前があるので、記入した。植松については栃木県工業学校の項で既述。その後は鷹田其石、小川三知、吉田金吉と初期の東京美術学校の卒業生が続く。次の伊藤啓次郎は明治三十二年から昭和十三年までの三十四年間勤務した。

日川中学——勤務期間は日川高等学校の教示による。最初は第一中学の吉田金吉が兼務したらしい。篠原良八は明治三十年から県内の高等小学校の訓導を勤めていたが、三十五年毛筆画の教員免許状を取得し同年第二中学の助教論となった。前田千寸は群馬県太田中学邑楽分校の項で述べたように、後に色彩文化史研究で名を知られる人。三輪常松は同校に二十六年間も勤務したが、絵画修

業歴は判明しなかった。

都留中学——山梨県中学都留分校として発足し、明治四十三年に都留中学となる。分校時代の図画教員は佐藤孫次郎しか判明しなかった。佐藤の勤務期間は別の勤務校に提出された履歴を参照した。佐藤が川端玉章と木村立嶽に学んだことは『帝国絵画名鑑』（大正5年，四版）を参照。都留中学になってからは田中春吉が図画教員となる。田中の絵画修業歴は不明。

県立高女——氏名，勤務期間などは当時の中等学校職員録，『山梨県職員録』及び雑誌『図画教育』の消息記事などを参照した。正確な勤務期間は判明しなかった。生島，岡野の経歴もはっきりしない。ただ，生島は担当教科からすると図画が専門ではないと思われる。また，岡野は図画教育会会員になっているので，図画が専門と思われる。山崎勇馬は師範学校との兼務である。

県立工業——土屋安彦の勤務期間は東京都公文書館の旧学務課文書中の履歴を参照した。檀参郎の勤務期間は谷村工業高等学校同窓会の教示による。土屋，檀ともに東京工業学校図案科の卒業である。檀参郎は作家檀一雄の父。

市立甲府商業——氏名，勤務期間は当時の中等学校職員録や『山梨県職員録』を参照した。図画担当が判明した高木，三浦，保坂の三名は，いずれも図画が専門の教員ではなく，たまたま図画を兼担したのだと思われる。

郡立蚕業学校——当時の中等学校職員録を参照。同校は現在の石和高等学校の前身。丹沢周吉については姓からすると山梨県出身と思われるが，経歴等は明らかにならなかった。

山梨英和女学校——『山梨英和学院八十年史』（昭和44年）を参照。高井正は地理が専門の教員らしい。また，山田弘道は『日本美術年鑑』（大正元年）によれば，成田等朝に学び藍々と号した日本画家であり，水晶印篆刻もした人であるが，先の『山梨英和八十年史』によれば明治前期の山梨県の教育体制の基礎を築いた功労者の一人であるという。

4. 長 野 県

長野県師範——前稿「明治期師範学校図画教員の研究」と変更点無し。

長野県松本女子師範——『信州大学教育学部九十年史』（昭和40年）所収の職員表を参照。百瀬四郎は経歴など不明。多湖極は『帝国絵画名鑑』（大正5年，四版）や『日本美術年鑑』（大正元年）によれば，松本藩の儒者安貞の子で，日本美術院に学んだ，白峰とか寒山と号する日本画家。藤岡亀三郎は大正期に児童の美術教育の研究で名を知られる人で⁴⁾，『児童の図画』（大正10年）や『児童の手工』（大正11年），『児童の図画の発達 標準成績』（大正15年）などの著書がある。昭和期には東京の暁星中学に移り，手工の教員となった。手工関係の著書もいくつかある。

松本中学——氏名及び勤務期間は『（長野県松本中学校／長野県松本深志高校）九十年史』（昭和44年）を参照した。明治十七年六月以前の図画担当教員は不明。明治十七年頃は東筑摩中学校と称したが，同年九月に長野県中学校松本支校となる。さらに一県一中学を定めた中学校令のため明治十九年九月長野県中学校の本支校のがすべて松本に移転廃止になり，松本の中学校が県下唯一の長野県尋常中学校として存続。また，一県一師範を定めた師範学校令により，師範学校は長野に移転廃止になる。それまで松本の師範学校と中学校の両方に勤務していた河野次郎は，この時師範学校

とともに長野の師範学校へ移る。河野は河野通勢の父で、高橋由一に学んだと言われる。「天絵塾門人牒」に名前がないので、天絵楼創設以前に学んだのかもしれない。河野の後任が松井昇である。松井は長野本校に勤務していたが、前述のように長野本校が松本へ移転廃止になり松本に長野県尋常中学校がつくられたので、松本に移って来る。師範学校とともに長野に移った河野次郎と勤務地を交替する形となる。松井は短期間勤めた後、東京商業学校へ転勤してしまう。数カ月後、十九年に廃校となった上田支校に勤務していた望月俊稜が後任となる。望月は工部美術学校出身。望月は中学校以外でも教えていたらしく、後に名をなす中村不折や丸山晚霞が少年期に望月に学んだ。望月の後任の武井真澄は東京美術学校鑄金科の出身であるが、絵画に転向し卒業後小山正太郎の不同舎に学んだ。

長野中学——前項で述べたように明治十九年の廃校直前の図画教員は松井昇。松井の後任が飯田支校に勤務していた松本富五郎である。松本は彰技堂に学んだが、それ以前に滋賀県師範学校で松井昇に学んだ教え子である。明治二十六年に松本尋常中学校長野支校として再設置、三十二年長野中学校となる。勤務期間等は長野高等学校の教示及び同校同窓会名簿を参照。支校時代の図画教員としては相馬忠三郎のみ判明。相馬は明治二十三年に小山正太郎の不同舎に入塾し、学んだ。深田は名簿には名が慶治とあるが憲治の間違いと思われる。深田憲治は渡辺文三郎、彰技堂に学び、そして不同舎に学んだ。金井義司は河野次郎に鉛筆画、岡倉秋水に毛筆画を学び、長野中学校の図画教授嘱託となる。その勤務に一時重なるが東京美術学校に入り図画講習科を修了。竹下一郎は最初だれに就いたかは不明。しかし、鳥根県尋常中学校を明治三十一年に卒業しているので⁵⁾、同校教員の西垣維新に就いたのではないかと想像される。町田清太郎は長野県出身で長野尋常小学校訓導を勤めながら長野高等女学校教授嘱託をしていた。訓導退職後、長野中学校教授嘱託となった。毛筆画・用器画の教員免許を得ているので、日本画専門であることはわかるが、修業歴等は不明。

上田中学——松本中学の項で述べたように廃校になった上田支校には望月俊稜が勤務していた。明治二十六年再設置されてから大正十三年まで常井久太郎が図画教員を勤める。常井は『明治美術会報告』第一回、二回（明治22年）の編集人である。その人となりや画業を伝える資料は知られていないが、明治美術会の中で信頼されていた人なのであろう。永地秀太の「松岡先生に就いて」（『松岡寿先生』昭和16年、所収）の中で、常井は帰朝後の松岡寿に習っていた人の一人として触れられている。しかし、明治二十五年三月から四月にかけての明治美術会第四回春季展覧会に浅井忠門人として油画を出品している⁶⁾。住所も根岸の浅井方である。二十六年には上田中学に赴任するのであるから、松岡の次に浅井に就いたと思われる。大正期に上田中学で教わった方の回想を上田高等学校から教示された。それによれば常井先生は図画と修身を受け持たれ、とても美しい水彩画を画かれ、運動会で売る手作りの絵葉書を指導されたこともあったそうである。また、絵画の事より「一日一善」の励行を言われたそうである。

飯田中学——松本中学の項で触れたように明治十九年廃校直前の飯田支校には松本富五郎がいた。『（長野県飯田中学校／長野県飯田高等学校）校史』（昭和55年）を見る限り、それ以前は特に専門の図画教員はいなかったらしい。明治二十六年飯田支校再設置以後の図画教員の勤務期間は、この『校史』を参照。ただ、岩井才太郎が最初から大正六年まで勤め、それに重なる形で相馬忠三郎と市川力蔵が短期間勤める。岩井は長野県尋常中学校卒業であるので、同校教員の望月俊稜に学んだと思われる。相馬については長野中学、市川については山形県山形中学の項で既述。

諏訪中学——勤務期間等は諏訪清陵高等学校の教示及び同校同窓会名簿を参照。宮野東洋以前の図画担当者は不明。宮野東洋は石川県師範学校出身。『洋画初歩』（明治18年）や『小学習画指南』（明治23年）等の著書がある。

大町中学——氏名と勤務期間は『大町高校八十年史』（昭和57年）、当時の中等学校職員録及び大町高等学校の教示を参照。初期の丸山、飯田、折井の三人は図画が専門ではないらしい。『大町高校八十年史』によれば百瀬は幽雪（友雪？）と号し馬の絵を得意としたが、退職後間もなく没したという。絵画修業歴等は不明。

野沢中学——勤務期間等は野沢北高等学校の教示による。長谷川曾一は静岡県師範学校を経て東京高等師範学校手工専修科を卒業した。普通なら師範学校等の手工専門の教員になるはずであるが、静岡県師範学校の図画教員であった杉本克次や松山良助に西洋画を学び、後に文部省展覧会に出品する画家になる。城勉一郎は一年間明治美術学校に学んだ後、黒田清輝の門に転じ東京美術学校の西洋画科選科を卒業した。佐藤孫次郎については山梨県都留中学の項で既述。

飯山中学——明治期の飯山中学の図画教員は森本兼之丞一人しかいない。森本については絵画修業歴や長野県在勤時代のこと、さらに郷里の島根県へ帰ってからの活動も含めて、石橋幸雄「二人の美術教師 その二 森本香谷」『松江北高等学校研究紀要』第19号（昭和57年？）に詳しく報告されている。それによって絵画修業歴のみ触れておく。松江中学や松江師範学校に学ぶ傍ら、松江出身の洋画家小豆沢亮一（碧湖）に学ぶ。その後、広島塩田鉄香や京都の望月玉泉に日本画を学んだ。長野県在勤時代以降は主に水彩画を研究した。

長野高女——氏名、勤務期間等は当時の中等学校職員録、『長野県長野高等女学校一覧』（明治45年）を参照。町田清太郎、金井義司についてはともに長野中学の項で触れた。山本シケについては国文と図画を担当していたということ以外不明。

松本高女——氏名、勤務期間等は『長野県（立代用）松本町立高等女学校一覧』（明治35～41年）を参照。創立直後に校長兼教諭の井田竹治も図画を担当したこともあるが、明治期の松本高女の図画教員は松原善人一人と言ってよい。松原については東京美術学校日本画科を卒業したこと以外不明。

上田高女——氏名、勤務期間については当時中等学校職員録や雑誌『図画教育』の消息記事及び上田染谷丘高等学校の教示を参照した。狩野、三浦、町田と日本画家が続く。町田については長野中学の項で既述。

下伊那高女——勤務期間等については飯田風越高等学校の教示および同校同窓会名簿の参照による。最初の五十子ノブエは多くの教科を担当していて図画専門ではないらしい。杉本金次は京都で加藤半溪そして竹内栖鳳に就いた日本画家。木下時蔵も京都で浅井柳塘および天野方壺に、東京で福島柳圃に南宗画を学んだ。高野喜作は京都高等工芸学校色染科の卒業であるが、浅井忠や鹿子木孟郎に就いた西洋画家でもある。同窓会名簿には受け持ち科目が染織、算術、用器画とある。高野が用器画、木下が自在画と分担していたのであろう。

その他——諏訪高等女学校には開校直後の明治四十一年頃、諏訪中学の宮野東洋が兼務していた。また、明治四十年頃、長野商業学校に小林直度という図画担当教員がいた。小林の経歴等は不明である。

5. 新潟県

新潟県新潟師範——旧稿「明治期師範学校図画教員の研究」と特に変わる内容無し。

新潟県高田師範——氏名、勤務期間は『新潟県高田師範学校一覧』（明治38、41年）を参照。明治期はずっと東京美術学校日本画科出身の図画教員が続く。高城次郎については東京府第一中学及び開成中学の項で触れた。

新潟県長岡女子師範——開校直後から昭和十二年まで藤巻直治が図画教員として勤務する。藤巻の勤務期間については『嘯月画集』（昭和54年）を参照。藤巻は嘯月と号し、東京美術学校日本画科卒業の日本画家。

新潟中学——氏名、勤務期間は『新潟県尋常中学校第一年報』（明治28年）から『同第八年報』（明治35年）その他を参照。山田叔二郎は高田叔二郎ともいう。経歴等は東京府の日蓮宗大学林中等科の項で既述。木村良吉は狩野勝川院（雅信）門下の四天王と言われた木村立嶽の子で、東京美術学校特別ノ課程を明治二十五年二月卒業。『東京美術学校一覧』の卒業生の項や雑誌『図画教育』の経歴紹介記事からすると二十五年中に新潟中学校に嘱託教員として就職したが、二十六年十二月に一年志願兵として入営し、二十八年四月に少尉になったらしい。それゆえ『同校一覧』には出て来ないのであるが、二十五、六年に新潟中学に勤務している可能性が大である。そうすれば、ちょうど入営期間を山田叔二郎が担当した形となる。木村はその後、静岡県師範学校に転じたが日露戦争で再び入営し、三十八年奉天で戦死した。山本昌の勤務は在勤中の山本に学んだという人の履歴から判明。川路新吉郎については茨城県水戸中学校の項で触れた。川路は新潟中学校退職後は自宅で製図や図案の仕事をしたとされるが⁷⁾、大正期に後述の私立新潟女子工芸学校の教員もしている⁸⁾。

長岡中学——勤務期間は長岡高等学校同窓会の教示による。ただし、長岡中学は大正四年に全焼し書類も焼失したので、大体の勤務期間しか判明していない⁹⁾。別の勤務校に提出した履歴やその他の資料で勤務期間が判ったり、より正確に限定できた場合は、それを記入した。山崎止真は明治十八年に幾つかの教科とともに図画の中等学校教員免許状も取得するので、表中に記入した。鶴殿清は長庚と号す日本画家で、東京美術学校絵画科第二回（明治27年2月）の卒業。鶴殿と東京美術学校同期の卒業である亀岡（寺井）末吉も長岡中学に勤務したらしいが、勤務期間は不明である。同期卒業であることを考えると、鶴殿の前後に勤務した可能性が強い。生出亀之進は栃木県宇都宮高女の項で既述。望月俊稜は長野県松本中学の項で既述。西方俊造は新潟県北蒲原郡出身で東京美術学校日本画科を卒業した。主に円山派を研究したらしい。伊勢寛一も東京美術学校日本画科の出身で、シンガポールに二年程滞在した後の赴任であった。西川メ太郎の絵画修業歴は不明。長岡中学に赴任する前は小県郡中塩田尋常高等小学校に勤務していた。

高田中学——氏名、勤務期間は『高田高等学校百年史』（昭和48年）を参照。明治32年以前の図画担当教員ははっきりせず。山崎止真は長岡中学の項目で既述。高城次郎は高田師範学校との兼務。高城の後任はやはり東京美術学校日本画科卒業の竹之下旧俊。竹之下の後任は東京高等工業学校図案科卒業の山岡盛。

新発田中学——氏名、勤務期間は『新潟県立新発田中学校一覧』（明治35、36、44年）及び新発田高等学校の『同窓会員名簿』（昭和51年度）及び新発田高等学校の教示を参照。高田叔二郎は山

田叔二郎として新潟中学の項で触れた。川崎周太は新潟県中条町出身。最初は私立美術講習所，次いで橋本雅邦に学び，さらに東京美術学校日本画科に学んだ。大正二年に没する。高橋政美は青森県八戸中学，秋田県大館中学，岩手県福岡中学に勤めた後に新発田中学に赴任。高橋は強健な人だったらしく前任校では図画とともに体操も担当し，新発田中学でも先の同校一覧によれば体操科主任，剣道部を分掌している。陸軍歩兵大尉でもあった。

佐渡中学——氏名，勤務期間は『新潟県立佐渡中学校第八年報』（明治45年？）及び佐渡高等学校の教示と同校同窓会の『同窓のおとづれ（会員名簿）』（昭和52年）を参照。吉田耕太郎は佐渡に生まれ，佐渡の坪井雲僊や東京の滝和亭に四条派や南宗画を学び，素僊と号した日本画家。吉田と勤務が重なる形で芳賀景介が短期間勤める。芳賀は東京工業学校応用化学科卒業であるが，毛筆画の免許状も持っている。東京工業学校では一時，化学と毛筆画の免許状が取得できたことがあった。

新潟商業——氏名，勤務期間は当時中等学校職員録と新潟商業高等学校の教示による。赤井貞助は地理，歴史とともに図画を担当している。西垣維新は新潟県師範学校との兼務。古川丈二は図画専門らしく，林翠香や県内の中等学校図画教員数人に学んでいる。

私立有恒学舎——明治二十九年素封家増村度次によって創設された学校¹⁰⁾。昭和十八年新潟県有恒中学校となる。図画教員の氏名，勤務期間は当時の中等学校職員録による。荒井栄太は図画教育会会員にもなっているのので，図画専門の教員と思われるが，経歴等不明。近藤政吉は体操と図画の担当で，図画が専門かどうか不明。

村上中学——氏名，勤務期間は当時中等学校職員録及び村上高等学校の教示その他を参照。柏倉慶重は新発田高等学校の同窓会名簿に明治三十三年四月から三十五年三月まで勤務したように出ている。これは新発田中学村上分校への勤務と思われるので，表中に記入した。柏倉は山形県鶴岡の出身で東京府師範学校の卒業。鉛筆画の教員免許状を取得しているのので，西洋画が専門の教員であろう。東京府師範学校では図画教員の高島信に学んでいるはずである。高橋要吉は雑誌『図画教育』の消息記事によれば赴任前は無所属で岩手県の遠野町に住んでいた。高橋は東京で小山正太郎や真野紀太郎に学び，鉛筆画・用器画の教員免許状を取得した人である。

柏崎中学——氏名，勤務期間は当時中等学校職員録や『東京美術学校一覧』の卒業生の項及び柏崎高等学校の教示を参照。斎藤金造は東京高等師範学校手工専修科の卒業。手工専修科の卒業でも，中学校であるから図画を担当した。斎藤は明治三十七年に長野県師範学校に転任するが，そこでの担当は手工であったので，本稿の長野県師範学校の表には出て来ない。森田豊次郎は春光，平山謙一は泳仙と号し，ともに東京美術学校日本画科出身。

小千谷中学——氏名，勤務期間等は小千谷高等学校の教示及び当時の中等学校職員録を参照。渡辺，佐々木，大越と東京美術学校日本画科の卒業生が続く。佐々木は新発田町の出身。渡辺忠三郎は小千谷町の出身。図画教育に関する論説を多く発表した人であった。

三条中学——秋保親美がずっと図画教員を勤める。勤務期間は三条高等学校の教示による。秋保は山形県鶴岡の出身で，鳳川あるいは鳳山と号す。秋保は明治三十六年から昭和八年まで教諭として勤め，昭和八年から十一年までと十七年から十九年まで嘱託として勤めた。生徒から尊敬され三条中学の名物先生であったと言われる。

糸魚川中学——中等学校職員録及び糸魚川高等学校の教示を参照。山科亀義は多くの教科を担当

していて、図画専門の教員ではない。板野栄一は郷里の岡山県で山下左春に日本画を学んだ人なので図画専門と思われる。板野以前に図画専門の教員がいたかもしれないが、確認はできなかった。

巻中学——勤務期間等は巻高等学校の教示による。最初の小和田惟徳は図画が専門ではなく、広島高等師範学校を卒業し、修身、国・漢文専門の教員である。久保提多は東京美術学校日本画科卒業の専門の教員。

村松中学——森田豊次郎の勤務は『日本美術年鑑』（大正元年）及び村松高等学校の教示によって確認。

新潟高女——勤務期間等新潟中央高等学校の教示による。竹村は石川県工業学校専門画学部卒業の毛筆画専門の教員。新潟高女の前は山梨県師範学校勤務。長峰登良雄は大河と号した日本画家で、東京美術学校日本画科を卒業してすぐの赴任。

高田高女——氏名、勤務期間は当時の中等学校職員録による。佐藤栄三郎、丹羽五十吉は高田師範学校との兼務。水谷四郎は静処と号し、東京美術学校日本画科選科の卒業。松川第八郎は図案科であるが、水谷と同期の卒業。新潟県十日町染織学校からの転任。

新発田高女——氏名、勤務期間は当時の中等学校職員録による。浅見スミノ、常川トヨともに多くの担当教科をもち、図画専門とは言えない。ただ、常川は図画教育会の会員になっていて¹¹⁾、意識としては図画専門であったかもしれない。小宮陸は『日本美術年鑑』（大正元年）によれば新発田町出身で松影と号し、日本画と図案が専門であった。

長岡高女——氏名、勤務期間は当時の中等学校職員録による。井村シゲヨは手芸、裁縫とともに図画を担当しているので、図画が全くの専門外というわけではないかもしれない。小泉ケイも習字、手芸とともに図画を教えているので、図画が専門かもしれない。

柏崎高女——氏名、勤務期間は雑誌『図画教育』の消息記事その他を参照。斎藤金造は柏崎中学との兼務。中西理英は秋田県大館中学の項でも触れたが、柏崎付近の出身らしく、町内の高等小学校に勤務していた。そして、当時郡立刈羽高等女学校と言った柏崎の当高等女学校に転任した。明治四十年頃取得した免許状は鉛筆画・用器画であるので、西洋画が専門と思われる。伊藤梅子は女子美術学校日本画科で武村千佐や端館紫川に学んだ。大正二年頃長岡高女に転任している。

十日町染織学校——氏名、勤務期間は当時の中等学校職員録による。永井源治の経歴は不明。多くの担当教科があるが、図画というより図案が専門の教員であったと思われる。松川第八郎については高田高女の項で触れた。

私立新潟女子工芸——小林キヌ（キネ？）の勤務期間は当時の中等学校職員録による。小林は図画が専門らしいが、経歴等不明。なお、同校の後身である新潟青陵高等学校の教示によれば同校資料中に小林の名は見当たらず、相原キヌという教員が明治三十九年四月から大正二年十一月まで勤務しているとのことであった。小林と相原が同一人物であるかどうかは確認できなかった。

村松工業——勤務期間は長岡工業高等学校の教示による。佐野喜太郎は石川県生まれ、峰吉と号し、東京工業学校付設工業教員養成所工業図案科の卒業。図画ばかりではなく図案も教えたと思われる。佐野より後の教員は確定できなかった。

加茂農林——氏名、勤務期間は当時の中等学校職員録及び加茂農林高等学校の教示による。堤三男は多くの教科を担当し、訓育指導に秀でた教員であったと言われる。石井勝四郎は専門が英語であるが図画も担当した。二人とも図画が専門ではないが、一年次に週二時間の図画を課すだけの加

茂農林学校ではやむを得ないことであろう。

注

- 1) 日本美術年鑑編集部『日本美術年鑑』（画報社，1912年），125頁。
- 2) 東京美術学校旧教官履歴中の島田の履歴には，明治四十二年一月に共立女子職業学校への嘱託勤務を許可する旨が記載されているが，それより以前から同校への勤務が中等学校職員録に記載されているので，明治三十年代から勤務していたのは間違いないと思われる。
- 3) 不忘会『（付録）福島晚晴翁』（不忘会，1942年），女子美術大学『女子美術大学八十年史』（女子美術大学，1980年）。
- 4) 都築邦春「美術学習における指導の意味Ⅱ－藤岡亀三郎の図画教育論について」『埼玉大学紀要教育学部』第38巻第1号，1989年，13-26頁。
- 5) 石橋幸雄「二人の美術教師の足跡－黎明期の郷土洋画界の功労者」『島根県立松江北高等学校紀要』第18号，1981年。
- 6) 明治美術会『明治美術会第四回春季展覧会出品目録』（明治美術会，1892年）7頁。
- 7) 図画教育会「会員の動静」『図画教育』第21号，1912年，44頁。
- 8) 中等教科書協会『中等教育諸学校職員録』第19版（中等教科書協会，1921年）。
- 9) 新潟県立長岡高等学校百周年記念事業実行委員会『長岡高等学校百年史』（同会，1971年）。
- 10) 新潟県立有恒高等学校創立80周年記念誌編集委員会『創立80周年記念誌』（新潟県立有恒高等学校八十年記念事業実行委員会，1976年）。
- 11) 図画教育会「図画教育会会員名簿追加」『図画教育』第14号，1908年。

付 記

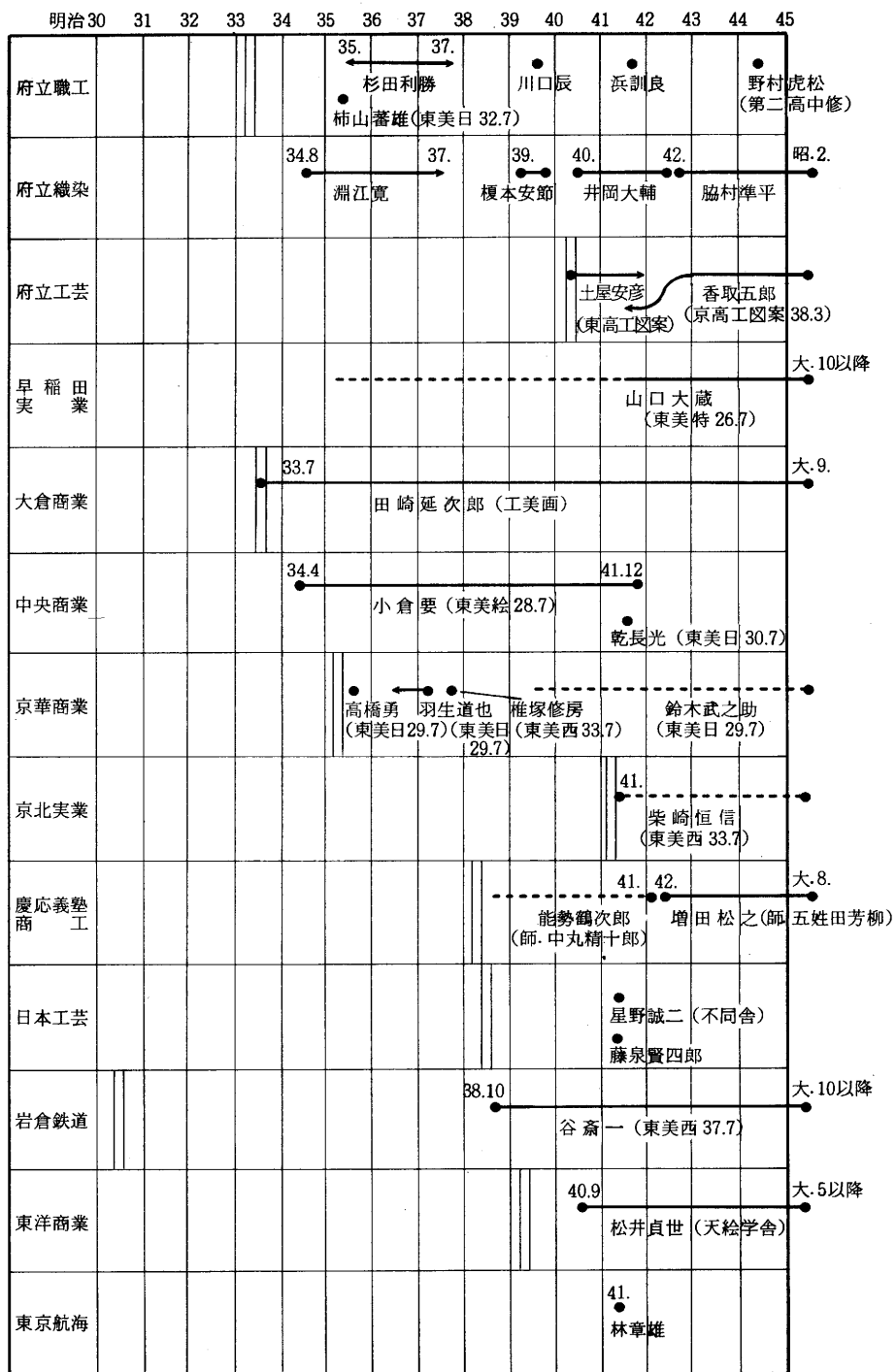
本稿執筆にあたり多くの機関と方々に御教示，御協力いただきました。以下に御名前を記して御礼申し上げます。もちろん，本稿の記述に関する一切の責任が著者にあることを申し添えます。

1. 高等学校

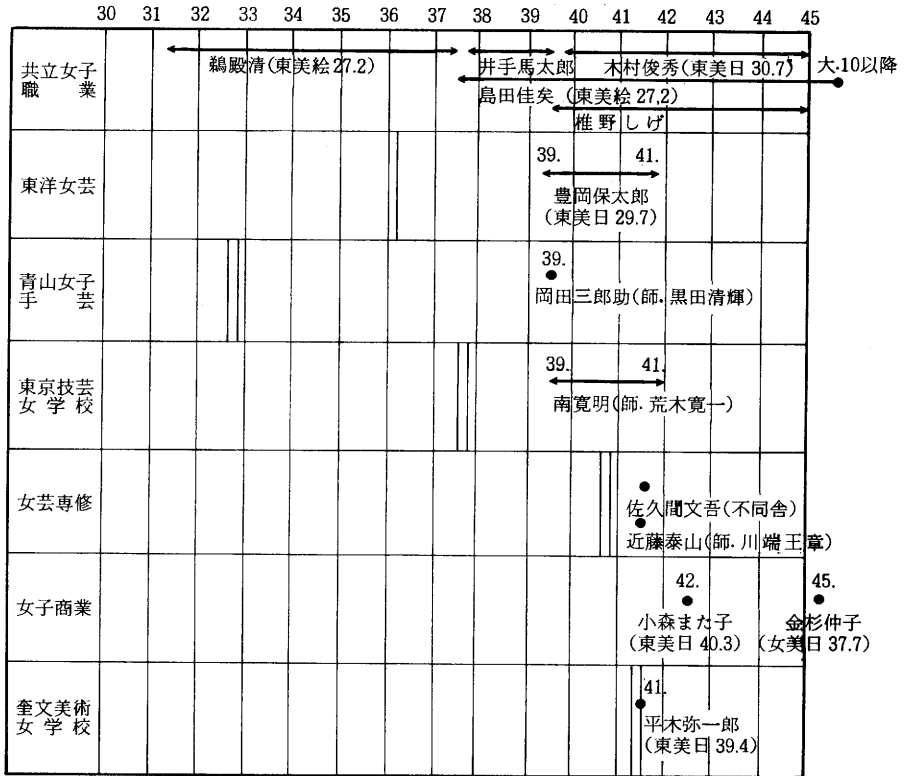
東商学園東洋高等学校，山梨県立日川高等学校，同甲府西高等学校，同谷村工業高等学校同窓会，山梨英和高等学校。長野県立松本深志高等学校，同長野高等学校，同上田高等学校，同飯田高等学校，同諏訪清陵高等学校，同大町高等学校，野沢北高等学校，同上田染谷丘高等学校，同飯田風越高等学校。新潟県立新潟高等学校，同長岡高等学校同窓会，同佐渡高等学校，同新潟商業高等学校，同柏崎高等学校，同村上高等学校，同小千谷高等学校，同三条高等学校，同糸魚川高等学校，同巻高等学校，同新潟中央高等学校，同加茂農林高等学校，同長岡工業高等学校，新潟青陵高等学校。

2. その他

東京経済大学附属図書館，慶応義塾大学福沢研究センター，吉田千鶴子氏（東京芸術大学），本井晴信氏（新潟県美術博物館），折井宏光氏（諏訪清陵高等学校），栃倉喜義氏（新潟中央高等学校），渡辺東郎氏（村上高等学校），捧弘賢氏（加茂農林高等学校）。



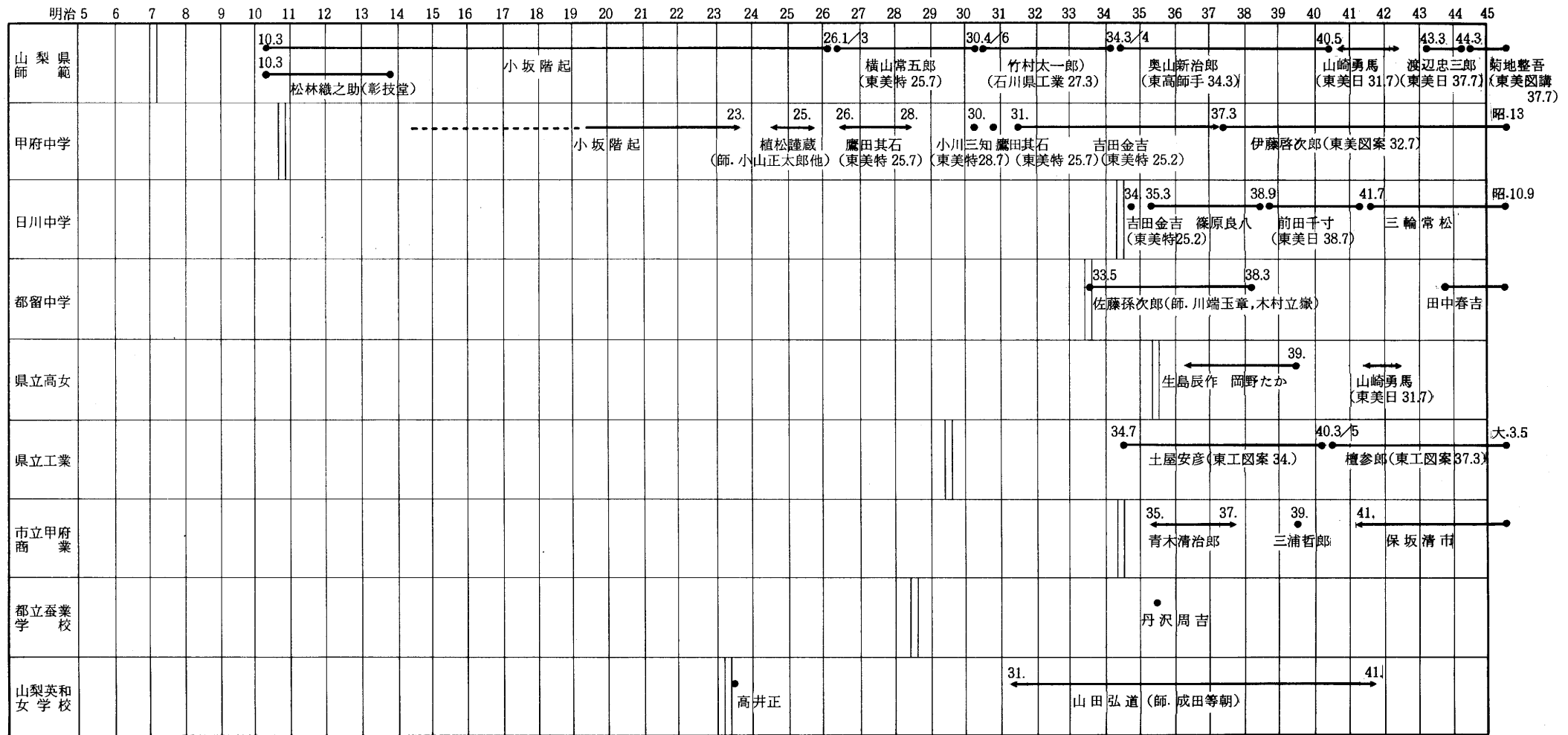
第1図 東京府の実業学校の図画教員勤務一覧 I



第2図 東京府の実業学校の図画教員勤務一覧Ⅱ

図の凡例

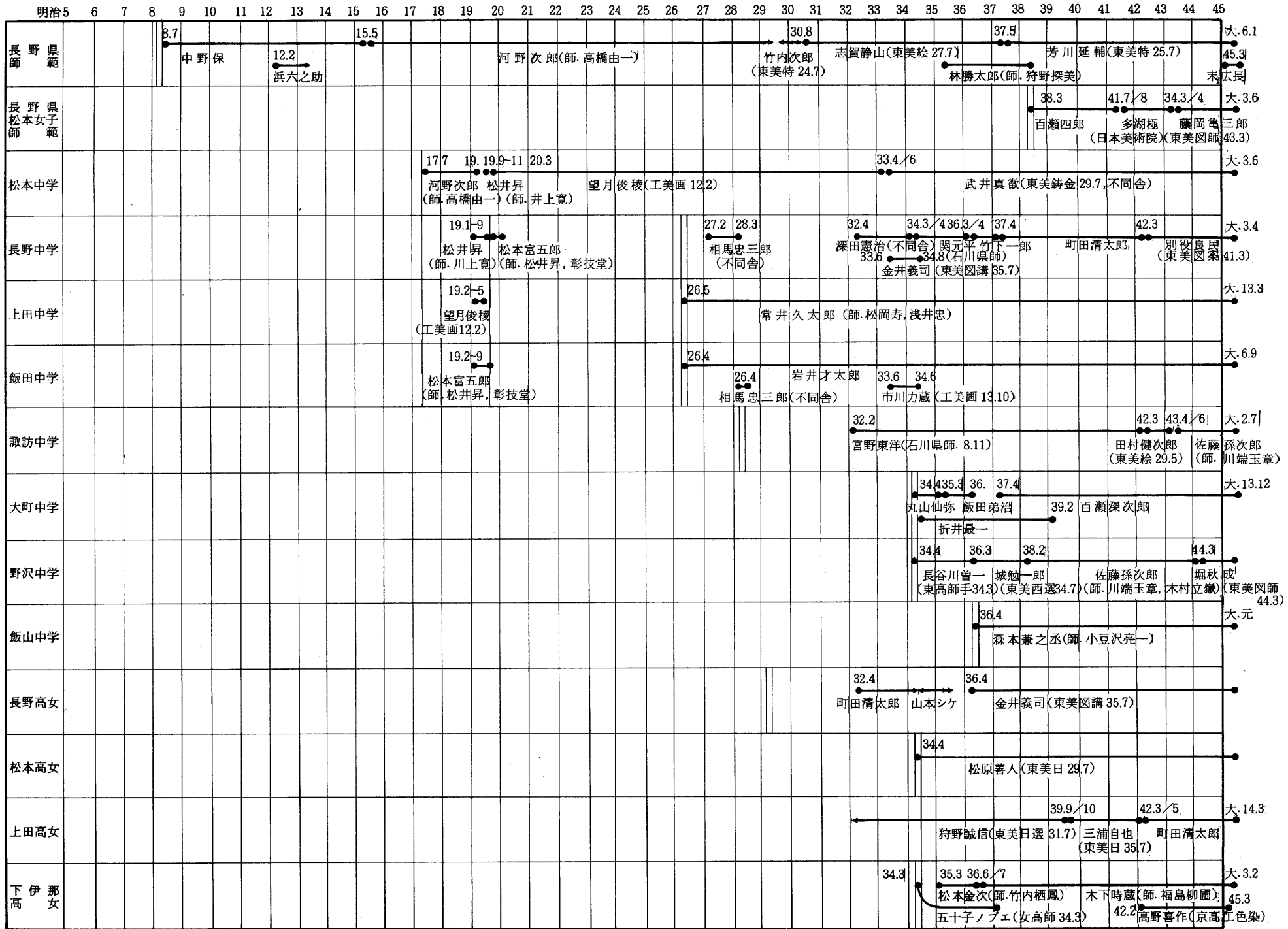
- ・校名は原則として明治末年の名称で統一した。校名の変遷は繁雑になるので記入していない。創立と廃校の時期は二本の縦線で示した。
- ・横の実線は勤務期間を示し、その両端の数字が就任と退任の年月を示す。後任者が前任者の退任と同月の就任ではなく、同年の次月以降就任した場合、38. 8/12のように表示した。これは前任者が明治38年8月に退任し、後任者が同年12月に就任したことを示す。また、同一人が同一年内に就退任した場合、38. 8-12のように表示した。これはある教員が明治38年8月に就任し、同年12月に退任したことを示す。実線の端が矢印の場合はその時点までの勤務が確実なことを示す。
- ・横の破線はその付近の勤務と推定されること、または勤務が確実でも図画担当が不確実なことを示す。
- ・人名の後又は下の括弧内には就学校名の略記あるいは師匠名を記入した。数字は卒業または修了の年月を示す。複数箇所に通学した場合、原則として後の方を記入した。ただ、重要と思われる場合、複数箇所や前の方を記入したこともある。出身校名の略記は第3図の下に示した。



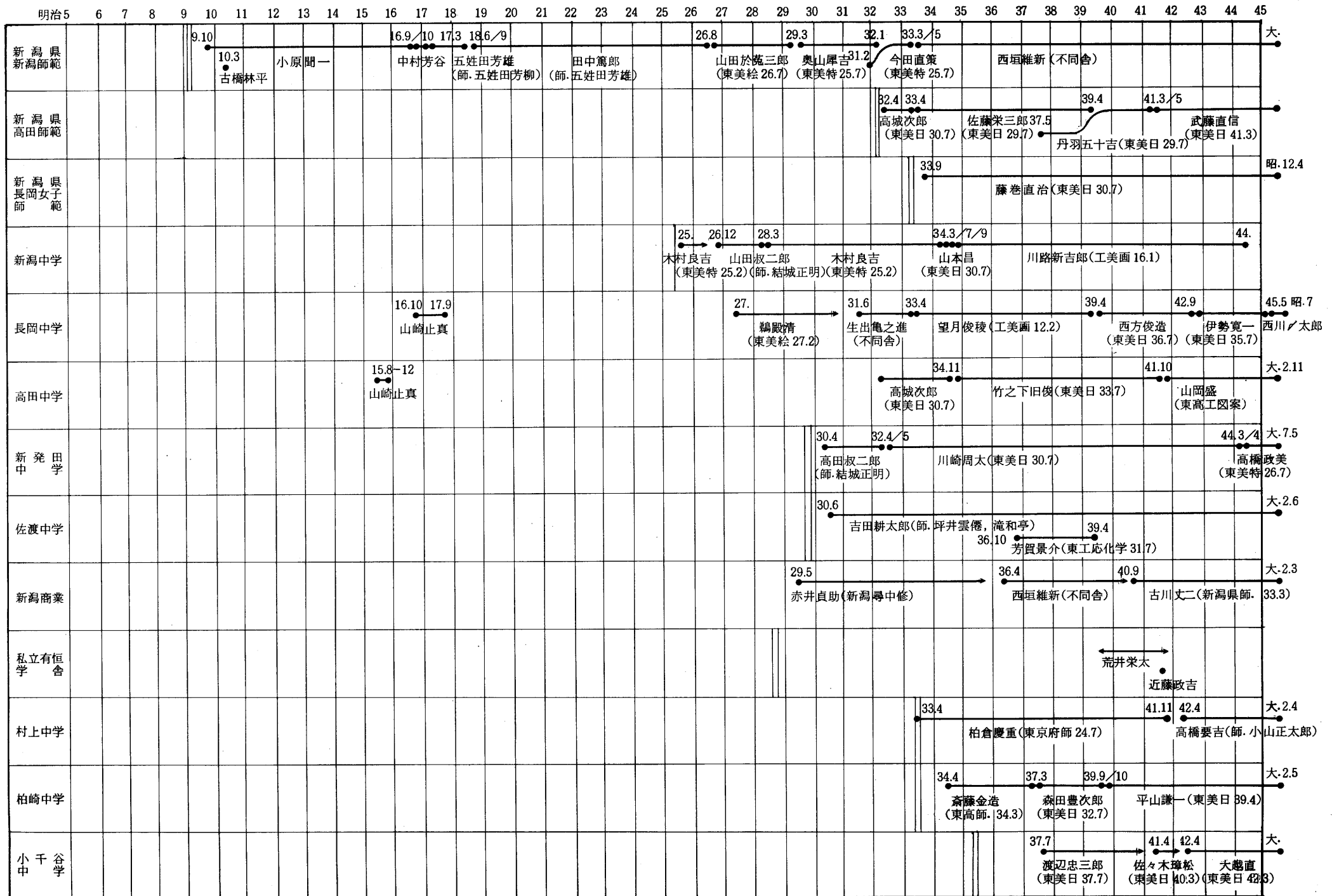
第3図 山梨県の図画教員勤務一覧

出身校名の略記

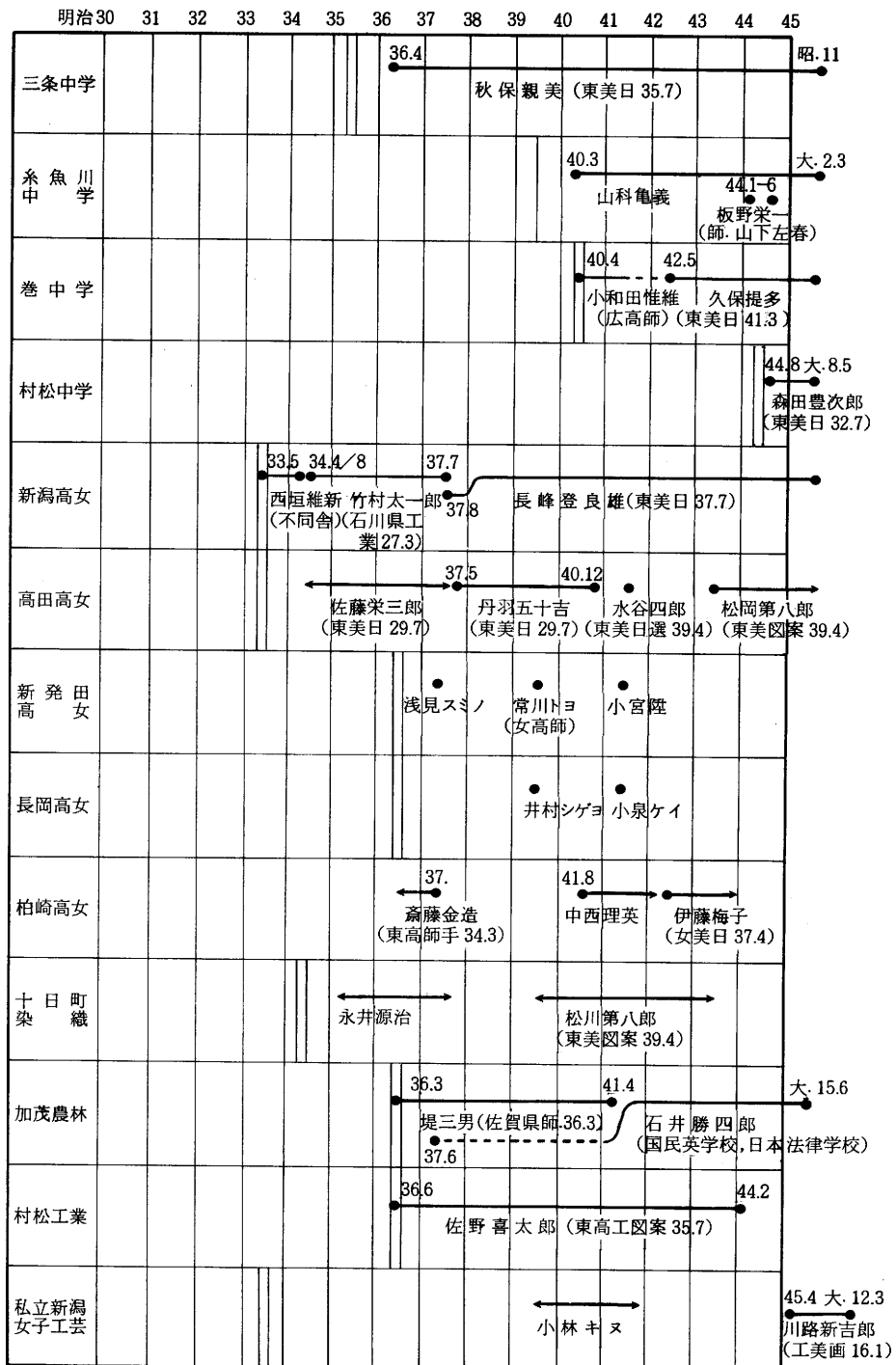
- (工美画) ……工部美術学校画学科
- (東美特) ……東京美術学校特別ノ課程
- (東美絵) ……東京美術学校絵画科
- (東美日) ……東京美術学校日本画科
- (東美西) ……東京美術学校西洋画科
- (東美図講) ……東京美術学校図画講習科
- (東美図案) ……東京美術学校図案科
- その他は以上の要領によって略記。
- (京府西) ……京都府画学校西宗
- (京市美) ……京都市立美術学校
- (東工) ……東京工業学校
- (東師) ……東京師範学校
- (東高師手) ……東京高等師範学校手工専修科
- (東高師図手) ……東京高等師範学校図画手工専修科
- (東美鑄金) ……東京美術学校鑄金科



第4図 長野県の図画教員勤務一覧



第5図 新潟県の図画教員勤務一覧I



第6図 新潟県の図画教員勤務一覧Ⅱ